

2023' 1 DancersWeb

トップインタビュー Vol.90



宮内浩之／NBA バレエ団プリンシパル

「すべての舞台がターニングポイントでした」

ノーブルで柔らかい雰囲気を含めた踊りと、ほとぼしる情熱を感じさせるバレエダンサー、宮内浩之。牧阿佐美バレエ団で活躍したのち、2014年NBAバレエ団に入団、2018年にはプリンシパルに昇格。2023年3月に再演される『バレエ・リュス・ガラ』への思いと、知られざる過去のエピソードも真摯に語っていただいた。

「すべての舞台がターニングポイントでした」

2023' Jan Vol.90

Dancers Web トップインタビュー



—6 歳からカヨ・マフネクラシックバレエ スクールに通われたきっかけは何ですか？

先生がとても有名な方で、姉に誘われていっしょに同じバレエスタジオに通うことになりました。やはり姉の存在が大きかったですね。

—プロになろうと決意したのはいつからですか？

16 歳から 18 歳まで 2 年間バレエから離れていました。バレエに対する向き合い方に迷いが出てきたのが一つの理由です。でも純粋に遊びたくなかったというのもあったかも(笑)。

離れていた期間は全然恋しくならなかったんです。でも 18 歳になったころ、クラスメートたちが就活の話をし始めて、「お前はどうするの?」と聞かれたときに、「僕にはバレエしかない」と改めて思い直し、通っていたバレエスクールに戻りました。

何も言わずにバレエスクールを辞めてしまったので、カヨ・マフネ先生に「すみませんでした」と謝りに行きました。先生は何も聞かず、ただ「おかえり」とあたたかく迎えてくれたんです。

そして、僕がどういう決意で戻ってきたかを察してくれて、

「明日から毎日来なさい。プロを目指していっしょにやりましょう」と僕の気持ちを汲み取ってくれました。それから 2 年間は、毎朝 8 時にスタジオ行って掃除をして、レッスン受けて、勉強とバイトをしてから、またスクールに戻って夜 10 時までレッスンをする毎日でした。

—バレエダンサーでなかったら、どんな職業を選んでいたと思いますか？

映画俳優(笑)。純粋に芝居が好きということもありますが、人に見られて評価されるのが性格的に合っているんだと思います。

—憧れのダンサーはいらっしゃいましたか？

人間性とか踊りがすごい人ですね。先生からこの DVD 観て勉強しなさいと言われて、何度も観たのはヌレエフ、バリシニコフ、ルグリ、熊川哲也さん、久保絨一さんなど、たくさんいました。ロベルト・ボツレの演技や表情もよく研究しました。

—米国のボストンバレエ団を留学先に選んだのはなぜですか？

カヨ・マフネ先生に推薦してもらいました。まず治安が良いこと、その前の年に姉がサマースクールに参加していたんです。

男性クラスは2つあって、僕は上のクラスにいれてもらったんですが、同じクラスのジェフリー・シリオと仲良くなって、ディナークルーズにいっしょに行ったり、屋上でマイケル・ジャクソンを踊ったり、良い思い出です(笑)。

ジェフリーくんは今、ボストンバレエ団のプリンシパルになっていますよ。

—出演した中で一番忘れられない舞台といえば？

人生ではじめて主役を踊った牧阿佐美バレエ団での『くるみ割り人形』です。

22, 23 歳の頃だから 12 年ぐらい経ちますね。

自分がお客さんとしてよく観に行っていた、トップレベルのバレエ団本公演の主役を踊るといのはすごく感慨深いものがありました。その当時のゆうぽーとホールだったんですが、お客さんを前に、スポットライトを自分が浴びるプレッシャーは相当でした。

有名な先生方や先輩たちに支えていただきました。舞台直前に先輩の森田健太郎さんから言われた言葉を今でも覚えています。僕の肩をポンポンと叩いて、「大丈夫だよ。どんなに緊張しても今日という日は終わるから。安心して踊りな！」と送り出してくれました。

—観客として見た舞台でもっとも印象に残っているものは？

バレエの舞台ではないんですが、15 歳のとき母が連れて行ってくれた来日公演のリバーダンスです。一度見せたいからということはいっしょに観たのですが、「舞台人になりたい」と強く思ったんです。

足を踏みならず音やダンサーの表情とか、すごく心に響く舞台だった。舞台の帰り道に「人の人生を変えるほどの舞台人ってすごい！」ってテンション上がりましたね。

—ターニングポイントとなった出演舞台はありますか？

今までずっとすべての舞台はターニングポイントでした。
命がけでひとつ一つの舞台を踊っています。発表会でも公演でも「次はこうしよう、次はこうしたい」という課題と思い出が残る。

あえて挙げるなら、2017年のNBAバレエ団の『ロミオとジュリエット』ですね。
プリンシパルになる直前の舞台でしたが、その舞台の前に膝をケガして8ヶ月間安静で休養していたんです。久々の復帰なのでプレッシャーもありましたが、ただ復帰するだけではダメだと思っていました。

—絶対安静の8ヶ月間はどのように過ごされていたのでしょうか？

身体の使い方、自分との向き合い方をすべて変えました。知識をつけるとか、ただ頑張るだけでなく、効率よく上達する方法を考えて実行した期間でした。

トレーナーさんにも週4回ぐらいの頻度で来てもらって、完全に復帰できるように治療に専念しました。

『ロミオとジュリエット』の舞台出演が控えていたので、本格的に動けるようになってから、本気モードで5ヶ月間、妥協は一切なし！

ダメなところがあったらその場ですぐ修正する。絶対身体を冷やさないようにするとか、食事や栄養にも気を配って私生活からぜんぶ変えました。家の水回りなども日頃から綺麗に掃除するようにして、そうした生活を日々から気をつけないと踊りも変わらない、成長しないと思ったんです。なので、舞台が無事に終わった後は、ものすごい達成感でした。「人ってこんなに変わるんだ！」って痛感しましたね。

—これまでダンサーをやめたいと思ったことはありますか？

何度もやめたいと思ったことはあります。単純に辛かったっていうのもあったかもしれない(笑)。じつは、牧阿佐美バレエ団を退団したあとにも1回諦めたので、二回バレエを辞めているんです。

—人生でこれまでもっとも大きな決断だったことは？

2回バレエを辞めて地元に戻って、2年間ぐらい特に何もしていませんでした。無気力になっていたのかもしれませんが。そんなとき、友達が交通事故で怪我してしまい舞台に出れなくなり、グラン・パドゥアの代役を頼まれたんです。

「宮内くんしかいない」と頼まれて、2年間全然踊ってなかったのに、1週間後に舞台に立つことになりました。

—その舞台直後はどんな気持ちだったのでしょうか？

冷静な気持ちで、「ちゃんとバレエに戻ろう」という決意が自然に湧いてきました。バレエに申し訳ない気持ちになりました。そして戻ったら、もう二度と辞めない。もうバレエをおろそかにしたくないと誓いました。

—2023年3月には『バレエ・リュス・ガラ』に出演されます。「レ・シルフィード」「ダットン人の踊り」「アポロ」の3作品の上演になりますが、どんな舞台になりそうですか？

有名なバレエ団なので知っている人も多いと思いますが、バレエ・リュスはロシアのセルゲイ・ディアギレフが1909年に組織した、とても歴史の深い伝説のバレエ団です。そのバレエ団の作品を現代のダンサーが踊るということにおいて、新しい風が吹くのではないかと思います。真似することが芸術ではないし、芸術は進化してゆくものだと思っています。

—宮内さんにとってのバレエ・リュスとは？

有名なダンサーが多すぎて(笑)、ジョージ・バランシンとか現代の巨匠振付家たちが、ほとんどそこに所属していたので、僕にとってはもはや、神に近い感覚です。

—バレエ・リュスを代表するダンサーといえば、ヴァーツラフ・ニジンスキーですが、どんな印象をお持ちですか？

僕は『バラの精』が大好きなんですが、現代でも上演され続けている。はじめに踊ったのがニジンスキーということもあって、そのインパクトの強さもあったのかもしれないですね。今でもあの衣裳は斬新なデザインですが、その当時はもっと驚きだったと思います。

—今後、バレエダンサーとして目標とされていることは？

ダンサーとしても人間としても器の大きい人になりたい。ダンサーを引退しても、バレエは続けていく。常に影響を与えられるダンサーになりたいです。バレエにはゴールがないので、どのぐらい近づけたか、死ぬときにはじめて分かるんじゃないかな。その直前まで成長し続けたい。

NBA バレエ団『バレエ・リュス・ガラ』

2023 年 3 月 4 日(土)、5 日(日)新国立劇場 中劇場

https://nbaballet.org/official/ballets_russes_gala/

【宮内浩之／NBA バレエ団プリンシパル】

1994 年カヨ・マフネクラシックバレエ スクールにてバレエを始め、カヨ・マフネに師事

2007 年ボストンバレエ団に留学。帰国後、牧阿佐美バレエ団に入団、主要キャストとして出演。

2014 年 NBA バレエ団に入団。2016 年バレエ団主催アトリエ公演にて振付、演出を担当。2018 年同バレエ団のプリンシパルに昇格

https://nbaballet.org/dancer_staff/dancer_staff-499/